岐阜大学附属図書館報　ISSN 0915−8960

Zun dō

寸胴

THE GIFU UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN　第23号 1997. 11

目　次

心の糧と情報の探索　−附属図書館に期待するもの−
宇野尚雄 …… 1
任期を終えて　梶山雅史 …… 3
私の目で見た日本の図書館　ヨルグチュウミット …4
館蔵資料紹介No.14（大型コレクション）
物理データベースとランドルト・ベルンシュタイン数値表　新村昌治 …… 5
雑誌記事索引CD-ROM検索手順 …… 7
グラフで見る附属図書館統計 …… 9
職員の異動 …… 10
お知らせ …… 10

心の糧と情報の探索　—附属図書館に期待するもの—

宇　野　尚　雄

はじめに：　工学部長からの電話で館長就任が評議会で決定されたとの報を受けて、何故かしら思い浮かんだのは下村湖人著「次郎物語」のことであった。受験勉強から解放されて、自分の将来の進路を模索する時期の大学入学直後に遭遇した小説の一つで、一年生の夏は多くの小説を読み漁った。図書館で借りたものか、貸本屋で手にしたものか、記憶が定かでない。気に入ると無理をして購入し直して再度読み、愛読書になったりした。読書量は少ない筆者であるが、ハッとして夢中に読んだものに出会うことができたことは、その後の人生の折々に多くの考える指針を与えてくれたように思う。

○附属図書館の役割：　（学生の利用）図書館の果たす役割を考えると、先人の残した文化的遺産・英知の情報源であることが基本であろう。内村鑑三著「後世への最大遺物」には、キリスト教的な人間としての基本的務めを考えさせるものがあった。近年の出版活動は、書籍に限らず、カセットテープ、ビデオ映像・電子情報（ＣＤ−ＲＯＭ等）と多彩に亘り、筆者には把握しきれない量の情報が飛び交っている。インターネットは更に革命的な情報を与えつつあり、年寄りには近寄りがたい手段が進展している。便利な反面，個人的に取捨選択する能力を養う必要のある時代が既に到来している。古典の漫画化された本がでている今日、学生諸君が「温故知新」できるように図書館利用を活性化する指導が教官に望まれている。平成９年３月の「岐阜大学附属図書館の改革の方向性」にも、本学学生の利用人数が少ないことが指摘されている。図書館が利用されやすい環境を用意する必要がある。戦後の大学の大衆化に伴う質的低下が生じているとの評論のある中で、知的好奇心を喚起すること、「未知の問題解決のために自ら文献検索で調べ、ある種の発見をする面白さ」を学生時代に経験してもらうことが大変重要である。

（教官・大学院生の利用）大学院学生レベルでは、必要に迫られて文献検索がかなり行われている。教官サイドは教育・研究上必要不可欠なリアル・タイムでの研究情報の把握にかなりのエネルギーを消費していて、これからの図書館にどんな機能を発揮させるべきかが問われているように思われる。

（図書館事業と予算）前館長時代から、図書資料の保存、目録カード・ＣＤ−ＲＯＭ等の電子情報資料化、には特別の配慮が加えられているが、予算的措置は不十分な体制である。平成９年度で見ると図書館運営経費全体に対して交付予算は２割程度（次年

度は15％強削減見込み）で、学内各学部から８割程度が捻出され、運営されている状況下で、先述の事業に僅かな予算しかあてがわれていない状況である。学長裁量の教育研究特別経費からも支援戴いている状況は、全学的・恒常的に認可されるべきものを臨時に認めていただいている変則状況下にある。電子図書館化への移行あるいは拡充の予算には、今後も億単位の予算が必要であるという。長中期的な全学的合意の基での計画的な運営を図らねば対応困難な情勢である（佐々木重雄：図書の電子化と岐阜大学附属図書館、寸胴、第22号、'97.6、pp. １－２.）。この難問にどう対処するか、岐阜大学附属図書館の将来像を描き、全学的にその協議をお願いし、評議会で方針が定まれば、それに基づいた進展を図るべきものであろう。岐阜大学としては、学内の総合情報処理センターとの連携をなお一層強化するとともに、他大学等の機関との連携にも努力しなければならないことがらである。

○本館の増改築と医学部分館との関係：本館の収蔵可能容量48万冊に対して蔵書数68万冊は既に約20万冊超過し、利用スペースを逼迫させている現状で、医療技術短期大学部移転に伴う図書資料の一時保管により、スペースはさらに狭隘化する。その一方で、情報化時代を迎えた電子図書館機能、教育研究体制の改革や生涯学習に対応できる学習機能をもつ施設が必要な趨勢である。一方、医学部移転後を想定した分館のあり方として、検討されている「メディカル・メディア・センター（ＭＭＣ）構想」（岩田弘敏：医学部のメディカル・メディア・センター構想について、寸胴、第19号、'96.6、pp. １－２.）に基づく新図書館構想の実現が本館機能の強化・高度化と効率的に関係付けられる必要がある。

○人文社会系と新しい分野の図書充実問題：地域科学部の設置以前から専門家が少ないために人文社会系図書の不足が指摘されていたけれども（宮野雄一：岐阜大学の改革と人文社会系図書の充実問題、寸胴、第21号、'97.2、pp.１－２.）、新設の生命工学のような新分野でもその充実の必要がある。貴重な古書の保存、酸性劣化対策に関しては、それら資料の学術的価値の認識度合いが専門分野・立場により異なり、それらの充実・保存には負担をどのような形で分け合うか、受益者負担原則とも関連し、難しい課題である。

以上は前館長から伺った引継事項の中から筆者の理解した重要な問題点を記してみたものである。いずれも非常に困難な問題であるが、基本的には岐阜大学構成員が大学人として岐阜大学附属図書館の将来像をいかに描くかに拠るもので、構成員の決断に負うところ大である、附属図書館の抱える問題を以下に箇条書きする。

（１）管理運営面：
　館長選考規則改正。

（２）概算要求事項：
　１）本館の増改築計画（狭隘化スペース改善、国際化・生涯学習等に向けた施設機能の充実、電子図書館化構想等による利用高度化等のため）。
　２）医学部分館の移転計画（ＭＭＣ構想）。
　３）図書館運営経費の予算編成。（予算編成方式・決定方式、電子図書館化経費、図書購入・製本費など）

（３）図書館サービスの強化：
　１）医療技術短期大学部の図書資料の本館への一時保管。
　２）集密書庫の図書の整理、重要図書の保存。
　３）利用者教育（特に学生の図書館利用の活性化）。

本稿は館長就任前に慌ただしく、誤解の懸念を持ちながら記していて、これらの諸問題にどう対処すべきか、理解を深め問題点の整理をしていかねばなるまいと考えている。これらの殆どは予算措置が併せて考慮される必要がある。その予算措置は各学部の承認後に認められるという他力本願的手法のために、図書館事業の推進が遅れ気味になっている現状から脱却可能か否か、本部予算と同様な大学全体予算の定率の図書館運営予算編成が可能か、答えを見い出したいが、各学部の了承が前提である。それにも増して、全体の予算規模が拡大する訳でないので、岐阜大学附属図書館としての特色・機能に何を持たせるかの「特化」を大学構成員が明確にすることが肝要であろう。即ち、関連する大学や公立の図書館との連携による効率的な機構の樹立とそこに占める岐阜大学附属図書館の位置づけを明確にして、各種情報機関・センター等の検索システムの利用と、附属図書館への大学構成員からの研究費配分限度を考慮した「附属図書館のあり方」を研究して、合意が得られるものにする必要があるのではないだろうか。

筆者は未だ図書館の機能も十分に把握していない状況ですので、上述した観点からの理解を深めていきたいと考えています。ご指導ご支援をお願い致します。　（うのたかお：附属図書館長、工学部教授）

任期を終えて

梶　山　雅　史

平成４年11月、館長に就任し、館報『寸銅』第９号に、図書館整備の基本方針として、電算化、資料保存、蔵書内容の充実との３本柱を掲げさせていただいた。また学部一貫教育体制に突入していく大学の様がわりに際して、なおさら「ゆったりと想いをくゆらせる精神の浮遊空間が、このキャンパスに不可欠ではあるまいか」、図書館が「古今東西の知的遺産への回廊としての内実を備えたものであってほしい」との原初的な思いを述べさせていただいた。

はたして、どこまで歩み得たのだろうか。２期５年を振り返り、心に残ることどもに触れてみたい。

まず、電算化について、平成５年、図書館と情報処理センター間を「情報ネットワークの実験的試行」として光ファイバーで結び、情報検索速度を高めることに取り組んだ。加藤前学長の配慮をえて、当時の情報処理センター長後藤宗弘教授、工学部の近藤明弘助教授の大いなる支援をえることができた。ありがたいことであった。平成６年４月に学内ＬＡＮが全学に敷設されたことにより、図書館の情報検索は全学的ネットワークにおいて一段と利用していただけるようになった。

とりわけ MEDLINE（医学文献データベース）をネットワーク環境で全学的に利用できるシステムを構築し得たことは、本学図書館として新たな次元への飛躍、一つの画期をなすことであった。このシステム導入を最も先進的方式によって実現した図書館スタッフの創意工夫、その労苦、情熱は、私にとっておそらくは生涯に残る感動的な思い出となるにちがいない。この新システムでの MEDLINE 導入は、じつは現実的には東大についで２番目に早い壮挙であった。本学の利用者のうけた恩恵の大きさを、館長を退任するにあたって、担当職員諸氏に対して心からお礼を申したい。間髪容れぬ対応の大事さ、当時の局長、主計課長はじめ多くの方々にお世話になったことも忘れ難い。

以後、ＣＤ－ＲＯＭ等の電子情報資料のさらなる整備にむけ、平成７年度から図書館運営費に新たに電子的情報資料費の項目を設定し、さらに平成９年度から遡及入力業務経費、自動貸出返却システム導入経費を設定し、学内の理解を得ることに努めてきた。学部、専門領域の利害にかかわっていくつもの越えねばならないハードルの厳しさに苦渋し、立ち往生したのも事実であった。この経費の財源問題が今後最大の懸案課題となろう。

情報環境のハード面においては、平成９年２月の総合情報処理センターの機種更新とともに、図書館電算システムが大幅に更新され、WWW画面からの検索等、種々のサービス機能が格段に向上するに至っている。本館マルチメディアコーナーに設置された学生用の端末機10台の満席状況、インターネットを利用しての情報探索の有様は、快適な知的空間、高度な情報提供機能の提供をめざす本館増改築、さらに医学都統合移転にともなう医学部分館のメディカル・メディア・センター構想の大事な未来イメージを指し示している。両事業の今後の豊かな展開を祈念してやみません。

つぎに資料保存について、館長に就任早々、国立国会図書館から「日本における図書館資料保存の実態調査」さらに国立大学図書館協議会から「保存図書館に関するアンケート調査」があいついで到来した。資料保存問題に手薄であった本館の実態、早急に措置を必要とするいくつもの課題が横たわっていることをいきなり自己確認させられることとなった。

図書館職員による資料保存検討委員会が発足し、具体的作業項目、対象、方法について検討をすすめる一方で、各学部長をお訪ねし、各学部からの予算拠出をお願いしてまわった。平成５年度に新たに資料保存費の柱をたて、３ケ年計画600万円の予算措置を承認していただくことができた。全学の協力を得て、資料保存対策に軌道が敷かれたことはほんとうにありがたいことであった。

紫外線対策、酸性紙の劣化対策、特別室の虫害防止、破損資料対策、書庫の環境整備、劣化資料のマイクロ化等、とりあえず緊急を要するものへの手当てを行った。酸性紙劣化・破損図書の調査、和漢籍１万５千冊へのナフタリンペーパー挿入、棚掃除等、マスクをして資料保存検討委員諸氏と行ったこれらの作業は、鼻を衝くナフタリンの臭い、埃や黴に涙し、咳き込んだ喉の痛みとともに、深く脳裏に焼き付いている。懐かしい思い出である。

学長からも和漢籍を収蔵している特別資料・フィルム庫ならびにウェブスターコレクションを収蔵している特別閲覧室の除湿機、空調機器の設備費を措置していただいた。

この論議のなかで、学外からの予算獲得努力が一

方で必要であるとの指摘はいかにもは当然のことであった。

平成７年６月、東京の如水会館でひらかれた国立大学図書館協議会・総会において、文部省の学術情報課長の所管事項の説明に際して、意を決して資料保存問題の重要性とそれへの対策についての見解を問う質問を行った。２日間にわたる分科会と全体会議を通じて、文部大臣への要望事項に資料保存対策問題を項目として立てることを主張した。幸い賛同を得ることにこぎ着け、国立大学図書館協議会の文部省への『要望書』に、図書館の電子化への対応、大学図書館職員の待遇改善とならんで、「大学図書館が所蔵する学術研究資料の保存対策」の項目が明確に文面として掲げられることになった。ともあれ頭出しを実現しえたことは、うれしいことであった。２日間にわたるしかけの緊張感も忘れ難い思い出のひとつである。今後さらに文部省の図書館行政の予算措置に具体化されるよう継続しての働きかけが必要である。

また資料保存にかかわって、本学図書館の貴重資料が何であるか、所蔵資料への自覚、関心を深めたいと願い、館報『寸胴』に「館蔵資料紹介」を毎号連載することを企画した。蕉門美濃派の祖、各務支考自筆の掛け軸（正徳元年（1711）頃）を最初に取り上げ、母利司郎助教授に詳細な学術的な解説をしていただいた。以後、毎号、学内外の先生方に貴重資料の解説をお願いし、先生方の蘊蓄に接する楽しさを満喫させていただいた。編集の最後のタッチとなる次号において、寛文期（1661～1672）の貴重書、奈良絵本『小しきふ』について、弓削繁教授に解説していただけることになっている。

願わくば「館蔵資料紹介」の継続をとの思いや切である。

この『小しきふ』はまた、資料保存の新たな試みとして図書館スタッフがＣＤ－ＲＯＭ化し、弓削教授の支援を得て図書館のホームページからインターネットで閲覧できるまでになった。

奈良絵本『小しきふ』のフルテキスト、書誌、解題、現代文訳の電子的情報発信の達成を目にして退任できることは、まことに本望この上ない喜びであり、精力的に尽力いただいたスタッフに重ねてお礼を申したい。

最後に蔵書構成の充実について、文理融合型の新学部・地域科学部の設置にともなって、文系図書の整備を図るため、学長から特段の配慮をもって、平成７、８年度と学内教育研究特別経費が措置された。学長の「図書館の蔵書は大学の顔である」との発言に鼓舞されて、図書館委員会が図書整備の論議に大いに花開かせてくださることを願って文を結びたい。

（かじやま　まさふみ：前附属図書館長、教育学部教授）

私の目で見た　日本の図書館

ヨルグチュ　ウミット

日本は、いろいろな面から見て私の国と比べられないほどちがっています。その一つは、図書館、または図書館の利用法のことです。

岐阜大学に入学する前まで、ほぼ毎日、私は近くの愛知県立図書館を利用していました。そのときの印象を以下に述べることにします。

愛知県立図書館は、県民が利用できるように１階から４階まで資料をテーマごとに分けるとともに、多くの本を直接手にとって選べる、大規模な開架方式を採りいれていました。

また、コンピュータシステムにより貸出や返却を素早く行うとともに、県民からの問い合わせに迅速に応じられるようになっていました。

さらには、オンラインで接続している市町村図書館からは検索や予約もできるだけでなく、近くの図書館を通じて貸出（１人に３冊以内、15日間）も行っていました。調査・研究のための電話や手紙による相談も受け付けてくれましたし、身体に重度の障害があって来館できない人には、本を郵便で届けてくれる貸出サービスもありました。

その他、社会人の専用席があったことも、利用者にとって魅力の一つでした。

岐阜大学の図書館については、まだ入学して間もないこともあって充分な感想を述べることはできませんが、愛知県立図書館と同様に、コンピュータ、ＡＶ、マイクロフィルム、インターネットなど、最近のテクノロジーを駆使して、情報を手軽に利用できるようになっていることに驚いています。

私の国（トルコ共和国）の図書館とは、こうしたインフォメーションの点で大きく異なっており、日本の図書館システムの特徴といえるでしょう。

図書館の少ない私の国でも、日本のような図書館システムが早く実現するといいなあ、と思っています。

（地域科学部１年）

館蔵資料紹介　No. 14

物理データベースとランドルト・ベルンシュタイン数値表

新　村　昌　治

ランドルト・ベルンシュタイン（LB）数値表をご存知の方はそう多くないかもしれない。理学、工学の分野の研究者にはそれなりに知られているのだが、一般的にはあまり知られていない。物理学・化学の数値データといえば、理化学辞典や理科年表に基礎的なものは載っている。それらは、その趣旨から言って適切なものではあるが、このLB数値表は（言い方は悪いが）そんな生半可なものではない。私が専門分野とする原子核物理学にかぎっても、研究に必要なデータが、しかも、発行時点で最新のデータまでが網羅されている。これは私のような理論物理学をやっている人間（理論屋）にとって、実にありがたいものである。図の例は、原子核に陽子を衝突させて他の原子核をつくる断面積をしめすデータの一部である。物理学・化学のあらゆる分野について、このような数値表が実に190巻（第６版）にわたって作成されている。現在のようなコンピュータネットワークや電子的なデータベースが存在しない時代には、文字通り、物理学・化学分野の研究には欠かせないものであっただろう。ちなみに、ランドルトもベルンシュタインも今世紀初頭に亡くなっているが、ドイツ人の知と学の創造に対する責任感のようなものをひしひしと感じる数値表である。

3 Excitation functions: 3.1 Tables　　389

E [MeV]	ΔE [MeV]	σ [mb]	Δσ [mb]	Ref.
3109 Reaction $^{233}_{92}U \rightarrow {}^{117m}_{48}Cd$ (continued)				
13.00		1.700	0.69	Oht 91
13.90		3.060	0.36	Oht 91
14.60		4.680	0.53	Oht 91
15.50		4.820	0.61	Oht 91
3110 Reaction $^{233}_{92}U \rightarrow {}^{114}_{49}In$				
60.00		1.300	1.20	Bee 83
80.00		1.700	0.50	Bee 83
100.0		3.400	0.20	Bee 83
3111 Reaction $^{233}_{92}U \rightarrow {}^{116}_{49}In$				
40.00		4.300	0.60	Bee 83
60.00		8.300	1.00	Bee 83
80.00		14.700	0.50	Bee 83
100.0		18.700	0.20	Bee 83

さて、やや専門的な話になるが、私はハイパー核、ハドロン物理学という分野の研究をしている。この分野は基本理論にもとづいて現象を予言すると言うよりは、実験的な事実をなんとか理論的に説明しようという、やや「どろくさい」分野である。原子核

内で起こる様々のハドロン反応は複合的なプロセスである。例えば、最近、私が直接あつかった反応は、原子核に波長の短い光（厳密にいえば仮想光子）をぶつけ、原子核内の陽子や中性子と反応させ、K中間子とハイパー粒子をつくるというものであるが、これらの粒子はすべて原子核内に存在する他の陽子や中性子の影響を受けており、加えて、量子力学でお馴染みの「中間状態」という仮想的な状態を通過するプロセスが重要な役割をはたす。また、これらのプロセスの多くは、基本理論からではなく、これまでの実験事実にもとづく研究の積み重ねから作られている。もちろん、そのすべてについて、私自身が実験事実に戻って検討するわけではなく、既に理論的なモデルとして確立しているものも多い。とはいえ、そのモデル自身が実験事実にもとづく以上、実験の進展によって変更されざるをえない。このような状況であるから、この分野では、理論的な研究も含めて、研究全体が実験研究の進展に依存しながら進むという特徴がある。基本理論から実験事実を予言できる日がくることを夢見ながら、まだまだ遠い観がある。

というわけで、なにかと実験データを調べる機会が多い。その場合に、幾つかの方法がある。一番効率的な方法は（残念ながら？）自分より研究が進んでいる理論屋に教わることである。REVIEW ARTICLE を調べると要領よく整理されていることがあるが、この場合には、直接聞く場合よりは古くなる。しかしながら、このような方法は理論屋や著

者個人に依存しており、場合によっては、重要な実験データを見落としている場合がある。

このような見落としをチェックする意味でも、次の第2の方法として、網羅的なデータベースを検索する方法が有効である。しかし、実験データそのものを知りたいというときにはINSPECのような文献データベースはあまり役に立たない。表題やキーワードでは一部の文献をヒットするにすぎない。ヒットした文献でも内容が「期待はずれ」の場合が多い。当然、文献が入手しにくいものも多い。この点では、実験データ自身がデータベース化されているLB数値表は重要である。もちろん、研究の基本となる実験データはその原論文にもどって検討することは不可欠である。また、多くの場合、必要な実験データは「最新の実験データ」に限らない。時代とともに実験方法が変化しており、別の実験方法によって得られた古い実験データは、独立性の高いデータとしての重要な意味を持っている。(LB数値表のように)累積的にデータをコンパイルしたものが必要である。加えて、第2の方法は、自分の専門分野からやや離れた分野の物理データが必要になる場合に役立つ。その分野の適当な研究者を知らない場合、また、時間をかけてデータを探しまわるほどでもない場合には第2の方法は効率がよい。

第3の方法は、専門分野の実験研究者に聞くことである。この方法がもっとも効率的であるように見えるが、経験的にはそれほどでもない。また、網羅的でもない。ときとして、「あの実験は信用できない」などとおまけがついてくる。中身を深く知っているがゆえの言葉であるが、理論屋としては戸惑ってしまう。

LB数値表は、第2の方法において中心的な役割を演じているものである。一方、今日、ネットワーク上のデータベースが急速に整備されつつある。原子核分野でも加速器実験施設などが作成したデータベース、理論グループが自分達の研究のために準備し公開しているデータベースなどが急速に増加している（現時点では整備中のものが多い）。図に示したものは、NIJMEGEN 大学の核力研究グループが世界に公表しているデータベースを、インターネット経由でアクセスした例である。こういったネットワーク上のデータベースの特徴は、アップデートが頻繁に行われ、いつの時点でも基本的に最新データを知ることが出来ることである。

このような状況の中で、LB数値表はどんな運命をたどることになるのであろうか。近い将来に限らなくても、これ程の規模と内容を持ったデータベースは他に存在しないだろう。しかし、ネットワーク上に無数の個別分野のデータベースが作成され、効率よく（しかも無料で）それを検索できるとすれば、LB数値表以上の便利さが得られるかも知れない。余談になるが、私が天文少年であった中学生の頃、計算尺と「丸善対数表」（実際に使うのはその中の三角関数表）を使って彗星の軌道を一生懸命計算した記憶がある。カシオの科学電卓を手にしたのは大学2年生のときであった。以来、計算尺も対数表も手にしたことはない。データベースと質の違う話であるが、歴史的な役割が変化し、場合によっては別のものと置き換わるかもしれない、という意味では、共通点があるようにみえる。このことは、図書館自身についてもいえる。機能が大きく変化するであろう。各図書館が幅広い情報を所有することを基本としているこれまでの形態は資源的にも効率的にも限界があり、今後は世界に分散している情報のアクセスセンターとしての役割を果たすことになるようになるだろう。その時、形を変えたLB数値表がさらに多くの研究者によって活用されていることを期待したい。

（しんむら　しょうじ：工学部助手）
（配置場所：参考図書コーナー 403.6 Lan）

雑誌記事索引 CD－ROM 検索手順

雑誌記事索引CD-ROMが、ネットワーク対応版の購入に伴い図書館だけでなく研究室からも検索できるようになりました。

研究室から検索を行う場合には、検索ソフトウェアのインストールが必要です。インストール手順は、岐阜大学附属図書館ホームページ（http://www.gifu-u.ac.jp/~gulib/index.html）に掲載されている”研究室からのCD-ROM検索案内”をご覧ください。

Ⅰ．概要

雑誌記事索引ＣＤ－ＲＯＭには、国立国会図書館が所蔵する国内刊行雑誌のうち、記事採録の対象に指定された各誌に掲載された論文の記事データが収録されています。採録誌の一覧は、ソフトウェアを起動し［表示（V）］－［採録誌一覧］をクリックすると見ることができます。

Ⅱ．ＣＤ－ＲＯＭの決定

①「雑誌記事索引」のソフトウェアを起動すると、図１のＣＤ－ＲＯＭドライブ選択画面が表示されます。「ＣＤ－ＲＯＭドライブをスキャンする」を指定して［ＯＫ］をクリックすると、使用可能ＣＤ－ＲＯＭドライブ一覧が表示されます。（使用端末によってドライブの表示が異なります。）

CD-ROMドライブ選択画面（図１）

②ＣＤ－ＲＯＭ一覧から使用するＣＤ－ＲＯＭを指定しダブルクリックする。あるいは、ＣＤ－ＲＯＭ一覧から使用するＣＤ－ＲＯＭをクリックした後［決定］ボタンをクリックすると図２のメニュー検索画面に移行します。

検索方式には、メニュー検索の他にコマンド検索もあります。コマンド検索を利用するには、メニュー［検索（Ｓ）］－［検索モード切替］－［コマンド検索］コマンドを選択します。コマンド検索の検索式は、コマンド＝オペランドの形式で論理演算子を組み込んで記述します。

例：ＫＷ＝日本＊（ケイザイ＋シャカイ）

メニュー検索画面（図２）

Ⅲ．メニュー検索

①検索項目

次のような項目からの検索ができます。これらの項目については、それぞれの項目内および項目間で複数個の検索キーを指定し、ＡＮＤ検索またはＯＲ検索ができます。

・論題中の単語
　ヨミ（半角、全角カタカナ）、漢字形どちらからでも可能です。
・論題名
　前方一致検索のみ可能です。
・著者名
　用語一覧機能が利用できます。
・雑誌名
・分類コード
　半角文字のみ入力可能です。
・ISSN，ISBN，請求記号
　完全一致検索のみ可能です。

また、次の項目については、上記で検索した集合に対して絞り込み検索を行う場合のみ指定する事ができます。絞り込み項目には、半角数字を入力してください。

・刊行年月日，雑誌巻号

②検索キーの入力

検索したい項目でクリックした後、次のいずれかの方法で入力を行ってください。

・キーボードから入力

検索キーとなる用語をキーボードから入力してください。

・検索キーを用語一覧から選択

検索キーを特定できない場合（例えば、著者の姓は分かるが名は分からないなど）には、途中までキーをタイプして入力項目右側の［参照］ボタンをクリックすると用語一覧機能が利用できます。

・検索キーを検索履歴から選択

以前に使用した検索キーで再度検索する時には、［履歴参照］ボタンをクリックすると履歴一覧表が現れますので参照したい履歴をダブルクリックしてください。

③検索条件

・検索画面下部で項目間の検索条件（ＡＮＤ／ＯＲ）を指定します。

ＡＮＤ指定：項目間に入力した用語を含む文献が検索対象になり件数を絞り込むことができます。

ＯＲ指定：項目間に入力した用語のひとつでも含まれる文献が検索対象になり網羅的に検索ができます。

・同じ項目内での単語間の検索条件は、単語間でのＡＮＤ指定は＊、ＯＲ指定は+を前後にスペースを加えて入力してください。

（ＡＮＤ指定の例：図書館　＊　情報）

④［検索実行］をクリックすると検索を開始します。

⑤「検索終了」ダイアログの［ＯＫ］をクリックすると検索結果が一覧表示（図３）します。

Ⅳ．一覧表示

一覧表示画面（図３）

・検索結果を１件１行の形式で簡略表示します。

・詳細を表示するには、詳細がみたいデータを選択し、［詳細表示］をクリックするか、そのデータをダブルクリックすると図４の詳細表示画面に移行します。

・複数のデータを指定するには「Ｃｔｒｌ」キーを押しながらクリックします。（解除も同様です）

Ⅴ．詳細表示

詳細表示画面（図４）

・検索結果の詳細情報を１件単位に表示します。

・［前頁］をクリックすると現表示の一つ前のデータを表示します。

・［次頁］をクリックすると現表示の一つ後のデータを表示します。

Ⅵ．印刷

①印刷コマンドの選択

メニュー［ファイル（Ｆ）］－［印刷（Ｐ）］を選択するか、ツールバーの印刷コマンドボタンをクリックします。

②印刷形式は、一覧形式と詳細形式を選ぶことができます。印刷形式及び印刷範囲はアクティブになっている画面により、印刷形式・印刷件数が決定されます。

Ⅶ．ＣＤ－ＲＯＭの変更

現在使用しているＣＤ－ＲＯＭを変更する場合、メニュー［設定（Ｏ）］－［ＣＤ交換（Ｃ）］コマンドを選択するか、ツールバーのＣＤ交換コマンドボタンをクリックします。

「Ⅱ．ＣＤ－ＲＯＭの決定」と同じ要領で指定します。

Ⅷ．ソフトウェアの終了

ファイル（Ｆ）－アプリケーションの終了（Ｘ）をクリックしてください。

グラフで見る附属図書館統計

平成８年度末現在で過去５年間の資料の所蔵状況及び利用動向の各種統計をグラフで表しました。

職員の異動　平成9年7月～11月

7.31 退　職　岡田　則子　情報サービス課図書係
9.1 採　用　内田　順子　情報サービス課図書係
10.31 退　任　梶山　雅史　附属図書館長（教育学部教授）
11.1 新　任　宇野　尚雄　附属図書館長（工学部教授）

お　知　ら　せ

・電子画像資料「小しきふ」のインターネット公開について

このたび、電子的図書館サービスの一環として、本学図書館の貴重本、奈良絵本「小しきふ」をインターネット上の図書館ホームページに公開しましたので、お知らせします。

テキスト画像や解題に加えて、翻刻や現代語も付し、資料保存上の観点から普段滅多に見る機会のない貴重資料を広く一般にも利用していただけるようにしたものです。

（附属図書館ホームページＵＲＬ：http://www.gifu-u.ac.jp/~gulib/index.html）

岐阜大学附属図書館報「寸胴」第23号　1997年11月28日
編　集　委員長：宇野尚雄　委員：近藤眞庸，柳田洋吉，山崎捨夫，青木利根男，村上喜廣，上口正昭
発　行　岐阜大学附属図書館
〒501-11　岐阜市柳戸１番１　☎058-293-2184